

5/10/09 「わたしは葡萄の木、あなたがたは枝」 ヨハネ15:1-11

ある思想家が書いています。「自分は本当に生き甲斐のある人生を生きてきたかという問いと真剣に向き合いたければ、死に臨んで自分は何を思うか？と自問自答する必要があります。」

確かにその通りだと思います。死に臨んで自分は何を思うかと想像した時、私達の脳裏に浮かぶのは、どれだけ財産を残したかということではないでしょう。仲間に比べて出世したかということでもないでしょう。どれだけの社会的地位を築いたかということでもないでしょう。

死に臨んで私達が思うもの、それはどれだけ人の役に立ったか、どれだけ他者の善に貢献したか、どれだけ人に喜んでもらえたか、どれだけ人を幸せにしたかということではないでしょうか。

つまり、死に臨んで思うもの、それは、どれだけ愛したか、ということであるに違いありません。

以上のコンテキストにおいて、主イエスの次の言葉を考えてみましょう。「わたしは葡萄の木、あなたがたは枝である。枝が葡萄の木につながっていないければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしに繋がっていないければ、実を結ぶことはできない。」

確かに、枝は木にしっかりつながっていればこそ、実を結ぶことができるのです。枝がいくら頑張ってみても、木から切り離されては、枯れ行くばかりで、実を結ぶことは不可能です。

しかし、それと同時に、主イエスの言葉は、「自分はいかに愛したか」という問いよりももっと根本的な問いがあることを教えてくれます。それは「自分はどれだけ愛されたか」という問いです。

何故なら、私達は愛されることによって愛することを学ぶからです。愛されたことのない人は愛することができません。愛されてこそ愛することができるからです。愛されるのが愛することに先行する理由がここにあります。

私達は両親から、兄弟から、親戚から、友人から愛されることによって愛することを学んだのです。回りに愛がなければ、愛することはできなかつたに違いありません。しかし、生まれてこのかた私達を育ててくれた人間の愛は、一つの共通な限界を内包しています。その限界は条件付きという点にあります。

愛の中でも最も純粹で絶対的と言われる親の愛を考えてみましょう。愛情豊かな親は子供のためなら命を捨てます。子供のためならいかなる犠牲も惜しみません。しかし、その絶対的な愛も、自分の子供だという条件が付いています。赤の他人の子供のためにいかなる犠牲も惜しまないと自信を持って言うことのできる親はいません。

そしてもう一つ。親の愛は、ある状況の下では、憎悪という最も醜いものに姿を変えてしまうのです。最近のテレビの映像に次のようなシーンがありました。アフリカの難民キャンプで食料の分配がありました。最後のパンを一人の母親が幼児に渡しました。それをもう一人の母親がもぎとり、自分の子供の口に入れました。突然二人の母親の間で凄まじいつかみ合いが始まったのです。

人間の愛はすべて条件付きの愛です。一つ間違えば憎悪と化す可能性を潜めています。家族愛も、友情も、愛国心もすべて決定的な欠陥を持っています。

つまり人間の愛は枝であって、それだけでは到底実を結ぶことはできないのです。枝は木につながることで実を結ぶことができるのです。条件付きの愛は、無条件な愛に結ばれてこそ、隔ての中垣を打ち壊す原動力となり得るのです。

無条件で絶対的な愛、それは主イエスの愛です。自分を十字架につけ、唾する人々のために神に執り成しの祈りを捧げる永遠なる愛です。この世の力がよってもたかっても押さえ込むことのできない無条件で真実な愛です。

永遠なる同伴者イエスこそ、私達がつながるべき葡萄の木です。あなたも私も、イエスにおいて無条件に、そっくりそのまま受け入れられているのです。私達がとても受け入れることのできない人も、私達と同じ様に受け入れられているのです。

イエスにつながってこそ、隣人に連帯の手を差し伸べる生き方が生まれるのです。これが人間らしく、生き生きと生きるということであるに違いありません。生き甲斐のある人生であるに違いありません。イエスに結びついてこそ、「死に臨んで自分は何を思うか」という問いに正々堂々と、正面から向き合うことができるのです。

